

若者の「居場所」とスポーツの内在的価値に関する基礎的検討

－ダンス部活動と若者のスケートボード活動の比較から－

The fundamental examination about the 'Ibashi' young people belong and the inherent value of sports

-From comparing dance club activities with skateboard activities by young people-

キーワード：『学校文化』『ハビトゥス』『スポーツ〈場〉』『私／共』

藤川 恭英

FUJIKAWA, Yasuhide

(世田谷区砧総合支所)

1. 問題意識と目的

ここに「トイレから愛をこめて」と題した新聞のトイレ特集記事がある。すごく大事なことなのに、おおびつらに語れない。トイレのことを真面目に考えてみようという主旨の特集である。そのなかに日本の中学校のトイレの現状を紹介した記事があった。「休み時間にトイレ前のベンチで談笑。手を洗いながらおしゃべり……。〈中略〉1年生男子生徒、佐藤主理(12)は「トイレは友だちとちょっとした会話をする場所」と話す(朝日新聞グローブ, 2015: G-2)。その記事を書いた記者も20年以上前だと、トイレの個室に入るだけでもはやしたてられた、と時代の変化に驚きを隠さない。今や学校のトイレも生徒の談笑場所になり、生徒の「居場所」になっているのだろうか。

阿比留は「居場所」という言葉や概念が多様な文脈の中で使われている」「居場所」概念については複数の論者が理論的整理を試みているものの、未だ「居場所」概念は精緻化され、共通認識が形成される段階には至っていない(阿比留, 2012: 35-36)という。「居場所」については様々な論議がある中で、田中は「居場所は他者との関わりのなかで自分の位置と将来の方向性を確認できる場」を意味していると述べている(田中, 2001: 8)。一方で萩原は、「居場所も主体も一方的な他者からの意味づけ、価値づけ、方向づけにおいて失われてしまう」「大人の側・教育者や指導者側の一方的なまなざし」においては居場所づくりはできない。居場所の実感は「生きられた身体としての「私」において体感」されるのだという。(萩原, 2012: 30)

また萩原は中村雄二郎の人間の自我の自立の限界から、「近代の自立思想は、文明的に発明されたものであるが、それが長い時間をかけて、大人の日常意識として定着してきたために、私たちはこの発明された「個人の自立」思想の問題性に気づくことがない。」と述べる(萩原, 2012: 26)。この発明された「個人の自立」思想を価値として制度化し、目的的かつ機能的に行動するための身体をつくってきたのは、近代の発明である学校ではなかつ

たのではないだろうか (I・イリッチ, 1977)。学校は、「従順な身体」¹⁾ (M・フーコー, 1977) や「象徴的暴力」²⁾ (P・ブルデュー& J・パスロン, 1991) に代表される価値をも押し付ける機関であろう。広田は学校で行われる教育という行為がそもそも、子どもたちの自由を制約している。「強制をとおして自律的な存在を作る」という (広田, 2015)。一方的な他者からの意味づけ、一方的なまなざしの場でもある学校で「居場所」が生まれるということは、一体どのようなことなのだろう。

そこで本稿は、スポーツの内在的価値を明らかにしていこうとする研究構想の一環として、運動部活動 (以下、部活動) が生徒の居場所として機能しているとする筒井の「高校の部活動と居場所づくり」 (筒井, 2012:127-147) の論考と、学校とは対極にある若者の下位文化を比較検討しながら、スポーツの内在的価値の基礎的検討として、スポーツによる若者の居場所づくりについて考察することを目的とする。

また若者の位置づけ方と支援については、子ども・若者育成支援推進法 (平成 21 年法律第 71 号) の施行を受けて、「子ども・若者ビジョン」 (内閣府, 2010) が、内閣府におかれた子ども・若者支援推進本部で作成された。ビジョンは、5 つの理念と 3 つの重点課題がベースになっており、今までの施策を継続しながらも、重要な新しい視点として、「社会の能動的形成者となるための支援」という言葉が入っている (広田, 2015)。この「社会の能動的形成者となるための支援」は、従来の「子ども・若者を社会に適応させる」、「子ども・若者の今を充実させる」という 2 つのモデルだけではなく、「子ども・若者に新しい社会を作ってくれる能動的な形成者になってもらう」ための支援という像を追究していく施策や活動」 (広田, 2015:313) が求められているのである。このビジョンを参考に、各自治体では、子ども・若者育成支援について計画を作成するよう努めることになっている。

藤川はスポーツの内在的価値の一つとして、スポーツによる若者の「社会の能動的形成者となる」ための支援への可能性を示唆³⁾ している (藤川, 2015)。その若者の育成支援が社会的な課題になっている現在、本稿が若者の居場所とスポーツの内在的価値についての論点を提示することで、今後のスポーツによる子ども・若者育成支援、スポーツによる若者の居場所の議論への問題提起になると思われる。

2. 方法と分析の枠組み及び用語の説明

本稿は『若者の居場所と参加ーユースワークが築く新たな社会ー』 (田中, 萩原編, 2012) 第 7 章の筒井愛知の「高校の部活動と居場所づくり」の論考を題材に、その対極にある田中研之輔の若者の「族」文化、「身体」文化の論文 (田中, 2002, 2003) を比較検討の文献資料とする。筒井は学校のなかに自分の居場所があることが大切であるとして、教員という指導的立場からダンス部の部活動での実践を基に、ダンスという身体表現を通して居場所が生み出される事例を分析している。一方、田中はストリートでのスケートボーダーの活動場所を「シカゴ学派の都市と下位文化に関する研究とカルチャースタディーズのユース

研究ノート

サブカルチャー論の結節点にスケートボードを据えて都市に生きる若者の経験的な側面を深く掘り下げて記述分析」(田中, 2003:50)を行っている。

筒井と田中は「若者」「スポーツ」という共通の視点がみられる。しかし、筒井は教員として指導的立場にあり、学校制度を担う当事者として部活動をとおしての事例報告を行っている。田中は自身が都市広場をスケートボーダーとして利用しながら、フィールドワークを重ねてきた。それぞれ、立場や考察にいたる方法論に違いがみられる。そこで本稿は「若者・スポーツ」という共通の視点以外に、「文化」と前述の田中が指摘する「関わり」(田中, 2001:8)を共通の分析視点にする。「文化」については、久富(久富, 1996, 8-41)が概括的に図示した「学校文化」の構成要素を、教育活動の一環とする部活動の議論を踏まえ、次に示す藤川(藤川, 2010)が図式化(図1)したものを本稿の分析概念とする。

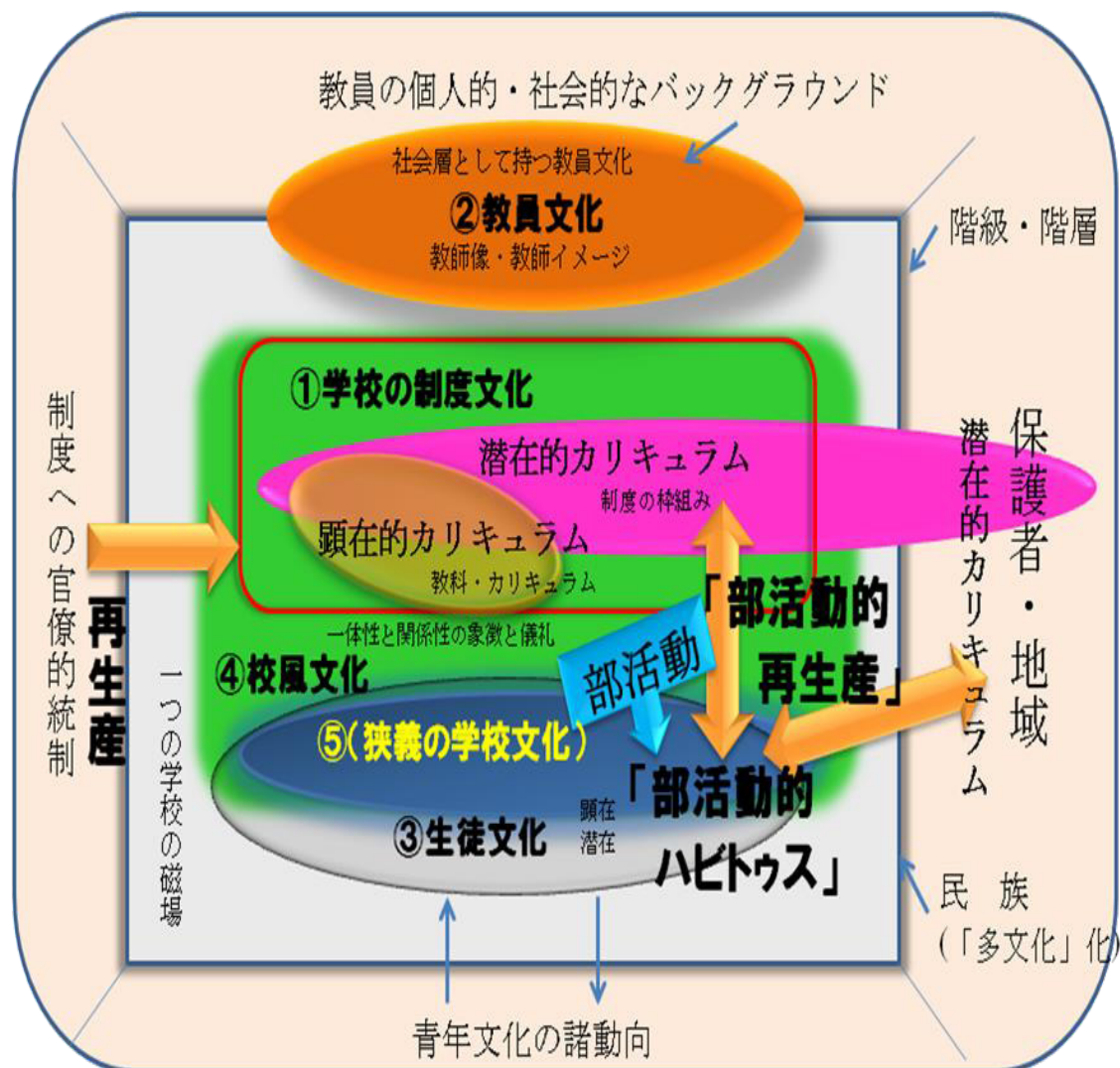


図1. 部活動的ハビトゥス・部活動的再生産の概念図

久富善之『学校文化の構造と特質』学校文化という磁場 柏書房, 1996:17の図を改変

ところでここで筆者と「若者」「スポーツ」との関係を述べておきたい。筆者は世田谷区職員として、児童館、青少年交流センターの館長として、子どもや若者の成長支援、(公財)世田谷区スポーツ振興財団でスポーツの推進、教育委員会事務局では地域運営学校や部活動活性化等の業務に携わってきた。これらの関わりにおいて、若者の居場所や部活動、スポーツを論じるのにまったくの部外者とはいえない立場については、十分留意しておかなければならない。しかしながら一方では、若者やスポーツ関係者、教員、部活動顧問等の関係者などの当事者たちの胸懷を並行的に視界に捉えることを可能にさせたといえる。とはいえ本稿では、これらの経験を「内側からの批判」という立場の考察ではなく、スポーツによる若者の居場所を文献・資料を用いて検討するものである。

2.1 学校文化の構成要素について

ここで分析概念の「学校文化」を説明する。久富は文化を端的に「人間集団の持つ生活の様式」を意味するだけではなく、文化的という言葉に「人間(達)の行動や関係を、その生活様式を成り立たせるある《型》へ向けて形成する」(久富, 1996:10)という意味を込める。したがって学校文化というものがあるとすれば、「学校に集う人々の行動や関係のある独自の《型》へ向けて人々を形成する日常的な働きかけの存在」(久富, 1996:10)であるとする。図1の概念図にも示したように、学校では顕在的カリキュラムだけではなく潜在的カリキュラム⁴⁾、すなわち隠れたカリキュラムも存在することが学校文化の特徴であるといえる(I・イリッチ 1977; M・アップル, 1986)。

ここで図1の部活動的ハビトゥス・部活動的再生産の概念図を説明しておくことにする。

①制度文化

学校制度そのものではあるが、人の行動をある《型》の組み合わせや繰り返しに組織することで成り立つことから、文化的性格を持っていると言える。

②教員文化

社会に数多くある職業文化の一形態である。それぞれの学校毎の特性を持つが、教員たちが一つの社会層としてそれを有する面が強く学校の内と外にまたがっている。教員文化は学校制度に関わってこそ成立・存在する。

③生徒文化

学校は、そこを生活の場とする生徒たちによって形成される。社会の若者文化の影響も強く受け、その点で社会とつながっている。生徒文化のある側面は、教師の視線と統制が届かない世界で子どもたち自身の仲間関係として展開する「学校の地下組織」と呼ぶものも存在する。

④校風文化

学校制度・規則(制度文化)と生徒たちの生活の現実・生徒文化と大きな距離と対立がある。教員は生徒に対して、教員文化を代表するというよりも学校の制度・規則を代表す

研究ノート

るかたちになる。それを埋めるものとして、学校の統一性を象徴し、教員・生徒の関係を規定し統一の下にあると意味づける象徴や儀礼が必要になる。校章、校歌、制服、入学式・卒業式、体育祭、文化祭等の式典や儀式、様々な日常的儀礼などである。部活動もこの中では顕在化する。その蓄積が学校特有の校風となるのである。

以上のように説明される4要素だが、各々の関係は①制度文化が顕在的、潜在的の両面で学校の枠組みをつくる基本的な骨格となっている。②教員文化と③生徒文化の関係は、生徒にとっては制度文化の代表者が教員であり教員文化の大部分は学校文化の潜在的要素である。生徒と教員を結ぶ回路は教師像や教師イメージが顕在的要素としてある。逆に教員にとって制度の枠組みが生徒の姿を見えにくくし「学校の地下組織」(生徒文化の潜在部分)が教員の見えない空間として存在する。このような二大集団の間の距離と分裂を④校風文化がつなぎ、二大集団の間の対立を緩和している(久富,1996)。部活動もその中の一つである。

2.2 部活動とハビトゥス

次に部活動について説明する。中澤は運動部活動について、「日本のように運動部活動が学校教育活動の一環としてこれほど大規模に成立している国は、他に無い。」「運動部活動の大規模な成立状況が示唆しているのは、スポーツと教育の日本特殊的な関係」(中澤,2011:373-390)であると述べる。日本の部活動は、運動競技が人格形成の有効な手段となるという教育イデオロギーとしてのアスレティシズムが、学校教育に重要な役割を果たしていくイギリスのパブリックスクールをモデルにしてきた(小石原,1991)。近代スポーツは、近代の産業化を背景に青少年期男子の規律訓練の性格を持って発展してきた経緯がある。近代五輪の提唱者でもあるP・クーベルタンも、スポーツを教育学に用いるのは青少年をたくましい「経済人」に陶冶していくのに有効であると考えたのである(小石原,1995,小路田,2013)。この近代スポーツを手段とする部活動が教育として、学校教育のなかで実践されることで、学校の日常あたり前として、当人の意識下に働く潜在的カリキュラムも部活動に存在することになる。藤川はそれら身体的規律訓練や優勝劣敗の仕組み、それに伴う教育的言説や部活動特有の教員と生徒、先輩・後輩の上下関係などを「部活動的ハビトゥス」と呼んでいる(藤川,2010)。ハビトゥスは潜在的カリキュラムと同じく、個人それぞれの日常生活に蓄積された個人にはそれと自覚されない知覚、思考、行為を生み出す性向を指し、文化的再生産のプロセスを構成する機能である(P・ブルデュー,1990)。また「部活動的ハビトゥス」は学校、生徒だけではなく保護者や地域にも「部活動的再生産」されていくと考えられる(藤川,2010)。

2.3 部活動とダンスの検討

筒井は「ダンスは関わりの芸術」「関わることで生み出される芸術」「関わって様子を見

せたり、関わり方を表現する芸術」(傍線筆者)という(筒井, 2012:130)。ダンスが芸術であるかスポーツであるかはここでの問題とはしない。本稿ではダンス部を文化部活動ではなく、運動部活動として論を進めるがその論拠を述べておくことにする。

まずスポーツと運動であるが学習指導要領総則では「部活動については、スポーツや文化及び科学等に親しませ・・・」「運動部の活動は、スポーツに興味と関心・・・」(文部科学省, 2008)、とあるように運動部活動の手段としてスポーツを用いていると考えられる。マイネルやフェッツは、人間の身体運動を「日常運動」「労働運動」「スポーツ運動」「表現運動」の4領域分けている(マイネル, 1981)。教科体育や部活動は「スポーツ運動」「表現運動」を取り入れた学習活動、課外活動と考えてよいのではないか。したがって、ダンスは保健体育科において、すべての生徒の履修科目でもあるように運動として扱われている。また部活動では、ダンス部は運動部なのか文化部なのかという点では、東京都の中学校ダンス部は東京都中学校体育連盟(都中体連HP)に加盟していることから運動部として扱うことが妥当だと思われる。

3. 「ダンス・スケートボード」と「学校文化・関わり」

若者が他者と関係性を持ちながら共通の目標に向かって共に努力した仲間、集団を日本では昔から「同じ釜の飯」を食べた仲間と呼ぶことがある。その独特な人間関係の典型は、江戸期から明治初年頃まで地方においてみられた「若者組」にある。若者組は一定の年齢になると若者だけで宿を借り、寝食を共にした全人格的な付き合いの場であったという(多々納, 1997)。若者組は村落支配者層の同族団による拘束から解放され、「自立的かつ自治的、ときには反社会的性格をも持つ集団のなかで、所謂「群れの教育」として、若者同士がお互い切磋琢磨し合い、社会的訓練を身につけ、同時に生涯にわたる友人を獲得する」(多々納, 1997:150)という伝統は、明治中期以降においては一部は青年団組織に引き継がれた。「同じ釜の飯」という文脈のなかで、今日でも多少ともその「古き良き思い出」を残しているのは部活動といえよう。その部活動に代表される集団は、戦前の旧制中学、高等学校などを中心に発展してきた部活動の歴史的経緯から、「同じ釜の飯」的性格の強い人間関係を基盤として学校文化のなかで発展してきた(部活動的ハビトゥスと同じ文脈で考えられる)。この「若者組」に端を発する「同じ釜の飯」という言葉には、田中が指摘した「居場所は他者との関わりの中で自分の位置と将来の方向性を確認」(田中, 2001:8)できる場、また萩原が述べる居場所が持つ4つの意味⁵⁾も「関わり」としての「同じ釜の飯」という文脈のなかに存在するのではないか。

ダンス部の活動のなかで、この「関わり」について筒井は次のような例を挙げている。

「ダンス部は、何て言うか、居場所なんよ」という言葉をよく耳にした。これは複数の

研究ノート

年代のメンバーの口から出てきた言葉である。またそれ以上に出てくる言葉は「ダンス部は一つの家族だから・・・」。これは、絆の強さを表す言葉として良く聞いた。

卒業生の中には自分の直接知っている後輩が卒業して以降も、たまに足を運んで後輩のダンスの指導に来る者もいる。特に本番前や合宿の期間中は、多くの卒業生が差し入れを持ってやってくる。そこには、卒業生を引きつける何かがある。単に、仲間と苦楽を共にした空間に、当時を懐かしむためだけにやってくるのではない。後輩を応援するために、ダンス部の伝統を伝えるために、そして自分もまた踊りたくなってなど色々な理由で、まだ知らない新たな後輩の元へやってくる。卒業生にとって、そこは今でも大切な「居場所」の一つなのである。

(筒井, 2012:128)

「同じ釜の飯」という「関わり」の文脈は筒井の教育的意図と一致する。ダンス指導において「自分たちだけで活動できる力を身につけさせるには、部員同士が関わる状況をつくりだす必要がある」(筒井, 2012:133) という指導理念から、生徒の主体的な取り組みを意図的につくりだしたのである。そこには筒井も生徒も気づかない、意識しない「部活動的ハビトゥス」が存在する。部活動は「スポーツと教育の日本特種的な関係」と言われるように、日本の学校文化特有のものである。そこでの体験は「同じ釜の飯」の文脈をとおして、「部活動的ハビトゥス」として卒業しても自らは意識することもなくダンス部という「居場所」に引きつけられているのであろう。

一方、田中がフィールドワークを行ったスケートボーダー達の集団は、都市広場を利用する自然と集まった集団である。そのスケートボードは、一般的にどのようにみられているのだろうか。

スケートボードは、学校体育の授業や、運動部活動で取り扱われていない。なかにはスケートボードを持ちこむことすら禁止している学校もある。学校側からすると、スケートボードは何ら評価基準をもたないものであり、むしろ逸脱行為や非行行為の温床として認識されているのが現状である。〈中略〉学校文化において正当な評価を受けないスケートボードは、学校生活以外の彼らの日常生活においては、身近な対象である。「スケートボードは、流行りで最初はみんな手をだすけど、すぐにやめていく。10人始めたら残るのはせいぜい1人か2人」(カッチャン 2001・10・26・金) 〈中略〉土浦の広場にたむろしスケートボードをする若者集団は、若者がスケートボードに興味を示し取り組み、その大半がすぐにスケートボードから離れていく中で、これまで辞めずに続けてきた若者達の集まりなのだ。

(田中, 2002:159-160)

スケートボーダーの若者は、大多数の人々には厄介な存在として認識されている。事実、田中の事例でも器物破損や騒音被害などのクレームが挙がっている。しかし、都市広場に集まるスケートボーダーは、「去る者は追わず・来る者は拒まず」各々が自由に直接他人に干渉する訳でもなく、程良い距離感を保ちながらスケートボードを楽しんでいる。とはいえ、そこでは「スケートはしがらみがない、自分で好きなようにやればいい」（2001・5・29・月）とはいうものの、技の習得について話し合い、改善していくようなやりとりもみられる」（田中, 2002:164）というように、仲間関係、他者との関わりのなかで自分の位置を確認しあっているのである。スケートボーダーたちは、大人の教育的意図や価値の強制がある訳ではなく自ら他者との「関わり」をつくりだしている。

一見、しがらみを嫌い、他人のことは干渉しない雰囲気をもつ彼らが、なぜ技の習得の話しあいなどを行うのであろうか。木村はダンスには主客の境界を溶解する力があると述べる。それは「恍惚（エクスタシス）」だという。「恍惚（エクスタシス）」は、本来、自己の外にある、魂の脱離の意味を持つ。「理性的認識によって人間が主体としてこの現実世界を支配している、その秩序を揺さぶり、主体を「脱主体化」してしまうのが、エクスタシス」（木村, 2001:247）である。

スケートボーダーもその「恍惚（エクスタシス）」をスケートボードで体感しているのであろう。スケートボードから生まれるその「恍惚（エクスタシス）」を彼らは、次のように表現する。

「トリックしたときからだがふわっとする感覚」（カズヤ 2001・7・21・土）

「スピード感」（ヒロシ 2001・7・26・木）

「スケボーした後って、眠れなくなるんすよ、こう、かーって感じってあるじゃないですか。集中するっていうか、入り込むっていうか。なんか興奮しちゃってんですよね」（トモキ 2001・6・17・日）

「なんかきもちいい、滑ってるとほんとにきもちいい」（ダイスケ 2001・9・21・金）

「トリックを決めることも気持ちいいし、スケートしているときに入り込むときがある。

あのたまにしか味わえない感覚もたまらない」（ユウジ 2001・9・18・火）

（田中, 2002:164-165）

この「恍惚（エクスタシス）」が他者との関わりの糸口であり、彼らにとって「恍惚（エクスタシス）」が体感できる場、「生きられた身体としての「私」において体感」（萩原, 2012, 30）できる場として、都市広場が彼らの「居場所」となったのであろう。つまり彼ら個人の欲求、一人ひとりがスケートボードが好きだ、楽しいという本源的な遊びの欲求から始まったといえる。遊びは自由な行動であり、命令されて遊ぶのはもはや遊びではない。また、文化は遊びとしてはじまったものではなく、遊びからはじまったものでもな

研究ノート

い。遊びの中ではじまったというように、ホイジンガは人間を遊ぶ存在として捉えている（ホイジンガ, 1973）。彼らは遊ぶ人間として「あるはっきり定められた時間、空間の範囲内で行われる自発的な行為もしくは活動」（ホイジンガ, 1973:73）というホイジンガの遊びの定義を実行したに過ぎない。このスケートボーダーの仲間関係にも「同じ釜の飯」という文脈をみることができる。他方で制度にとらわれない、制度に規定されない彼らの文化は、学校文化の「部活動的ハビトゥス」とは違った独自のハビトゥスを形成し、再生産しているのかもしれない。

スケートボーダーの都市広場での文化は、教育的意図もなく象徴的暴力もない「居場所」であり、ダンス部の学校文化のなかでの「居場所」とは対極であろう。

4. 「居場所」への囲い込み

部活動では「指導者として、生徒だけだとお互いに関わるのが面倒だったり、手間がかかったり、時間がかかる場面では、より意識的にサポートしながら「関わる場面」をつくりだしていった。」（筒井, 2012:144-145）というように、意図的に生徒の「関わり」の場をつくりだしている。それを筒井は「居場所化のための演出」と呼んでいる。この演出は顕在的な、目にみえる教育技術であり、指導力とも呼ばれる教員としての能力をも問われる生徒との関わりである。そこでは隠れた、隠されたなかで、指導者の権威と指示には従わなければならないことを同時に教え込んでいる。それはまるで生徒たちの耳もとで絶えずささやき続けているかのように。その結果として筒井は次のように述べている。

その結果「仲間と共に時間と場所を共有し、共通の目的のためにお互いを認識し、その活動の結果としての作品が、客すなわち社会に認められる」という活動形態が定着した。

こうして結果的には萩原の指摘する「相互承認」「生きられた身体としての自分が相互浸透的に伸び広がる」「世界のポジションの獲得」などを実現したことになる。

（筒井, 2012:145）

このようにダンス部では、「参画」を意識的に演出して「自分と他者との相互承認的な関係を積極的につくっていく契機」（萩原, 2001:65）としていったと思われる。この演出の場は学校という場であり、部活動も学校文化のなかで常に生徒は監視と観察⁶⁾の対象であることを忘れてはならない。なぜなら教育は「すでに何か知識や技術やルールを獲得している人が、それを持たない人に対して及ぼす作用」（荻谷, 2008:44）のことであり、元々ここには対等の関係がないのである。そして繰り返しになるが、そこには顕在的、潜在的な権力が働く象徴的暴力の場である。ダンス部の活動は学校という囲い込まれた場で教育的意図をもった「居場所」で行われている活動であることを忘れてはならない。

では都市広場でのスケートボーダーの活動は、自由で大人社会が何の意図ももたない権

力が及ばない「居場所」なのだろうか。

土浦駅西口広場が設置される以前は、土浦駅前の「ウララ広場」がスケートボーダーにとって格好の場所だった。〈中略〉ウララ広場でのスケートボーダーの活動は、縁石の破損、ゴミのポイ捨て、スケートボードと縁石が接触するときの音、滑るときのウイールの音、彼らの騒ぎ声等に対する苦情を巻き起こす。

(田中, 2003:51)

その後は警察官の注意や警備員が見回りに来ると逃げるというイタチゴッコの末、ウララ広場はスケートボード全面滑走禁止になる。しかしその後、土浦駅西口広場がスケートボーダーによる署名活動、市議会議員の働きかけでスケートボード滑走可能になる。そのことが、結果的に自分たちを広場に囲い込んでしまったという。

自分たちを土浦駅西口広場に囲い込んでしまった状況について、オサムは次のように語る。今のところは、なんかここ（土浦駅西口広場）は俺らが獲得した場所って感じですけど、結構騙されたかなって思うんですよ。ケーカン（警官）（括弧筆者）は楽じゃないですか、ここに（俺らを）囲っちゃえたわけですよ。ウララで滑ったら、広場も閉鎖される。脅かされているんですよ、軽い脅迫ですね。こうやって俺らのスポットは消えていく。それでも、そんなスポットは探せばいくらでもあるけど（6. 17日）

(田中, 2003:53-54)

彼らは大人社会による囲い込みを悔いながらも、「スポットは探せばいくらでもある」と嘯き、自分たちの状況を受け入れている。「彼らには都市広場以外に、「ストリート」に無数のスポットを創造できる」（田中, 2003:54）のである。つまり、彼らのスケートボード欲求、「恍惚（エクスタシス）」＝「生きられた身体としての「私」において体感」を満足させる「居場所」は、「支配的なもの」に直接的に抗うのではなく、とりあえず一時的に受け入れることで管理や排除などの圧力を無効化」（田中, 2003:54）しているといえる。

学校という制度的な囲い込みだけではなく、目に見えないかたちで「居場所」への囲い込みが行われていたということになる。その「居場所」を一時的に受け入れることで管理や排除などの圧力を一時的に無効化する巧みさは、若者があるスポーツ（スケートボード）を社会化するための知恵であり、社会と相対するときの葛藤でもある。と同時に社会関係形成の過程への扉でもあろう。

5. まとめにかえて

以上、「学校文化」と「関わり」を分析視点として、ダンス部活動と若者のスケートボ

研究ノート

ード活動を比較し若干の考察を行ってきた。ここでは、本稿の基礎的検討のまとめにかえて、次の論点を提示し今後の課題としたい。

本稿で取り上げてきたダンス部活動とスケートボード活動にまず、共通しているのは、人のスポーツをしたいという本源的な欲求である。スポーツによる「恍惚(エクスタシス)」の体感。スポーツによる「生きられた身体としての「私」において体感」できる「居場所」。そして、これらの共通項すべてにまた、共通するのは、スポーツ〈場〉である。

ブルデューは〈場〉の概念⁷⁾について、「行為者たちが置かれ、そこで振る舞うことになる一定の構造をもったフィールド」を意味しているという。そこでは、政治〈場〉、スポーツ〈場〉、芸術〈場〉、教育〈場〉など様々な〈場〉が想定される(石井, 1993)。松尾はブルデューの議論を踏まえて、スポーツ〈場〉を次のように定義している。「スポーツ文化にとって正しいやり方や正しいあり方を示す文化的正統性という一つの価値を賭けて、スポーツに利害・関心を有する人々(アスリート、監督・コーチ、審判、保護者、競技団体関係者、観衆、雑誌・新聞編集者、学者、評論家など)の総体の間に結ばれる客観的諸関係からなる理念的に想定された空間のこと」(松尾, 2015:21)である。これまでスポーツの文化的な正統性のあり方を問うとき、学校で行われる青少年の心身の健全な育成、発達を目的とするスポーツ、すなわち規律・規範を中心とした、身体の規律訓練の性格を強く持つものであったことは前述のとおりである。そして、社会的にもスポーツの正しいやり方、正しいあり方が、部活動的ハビトゥスとして再生産されてきた。その学校では、命令・禁止・許可・質問・誘導・説得・観察・評価など、教育に関する行為が、子どもたちに対する権力作用として働く、教育〈場〉である(広田, 2015)。その学校部活動でのスポーツ〈場〉は、教員(指導者)からのトップダウン的な性格を持ち、当事者(生徒)たちを常に受け身の立場に置いてしまいがちである。とはいえ優勝劣敗を争うスポーツ〈場〉での「居場所化のための関わり」は、教員(指導者)にとっても、スポーツの文化的な正統性を自問自答する葛藤の場でもあろう。スポーツ〈場〉での生徒は、指導者に対して従順であることが、上達のための一つの要素であるとされてきた。その従順な努力の結果として、生徒にも指導者にも、更なる成果(過度な業績主義)を関係者等から求められることも往々にしてある。したがって、「居場所」としての部活動のスポーツ〈場〉は、これらのことを含め、教員(指導者)の「関わりの演出」による部活動的ハビトゥスには、十分に留意しておかなければならない。

他方で、社会の制度に無関心でそこから逃れつつも、結果的に制度に取り込まれた「居場所」で活動してきたのが、スケートボーダーである。彼らの「居場所」であるスポーツ〈場〉(都市広場)では、スケートボードによる「恍惚(エクスタシス)」が、他者との関わりの糸口であった。遊びは、常に「他者との関わり」を前提としている。遊びに生じる「面白い」という感情は、「他者」との関係なくしては生まれない(松田, 2011)。スケートボーダーの「居場所」であるスポーツ〈場〉にはそれがあった。だからこそ、「マナー」

といったような「公共圏」の形成にも通底するであろう主体的で自発的な形でしか作りえない「遊戯関係である」というメタメッセージが存在しなければ、この行為はなりたない」（松田, 2011:16）という松田の見解は、「居場所」にとって重要な視点である。

スポーツ〈場〉で対外的な利害状況が絡む「他者との関わり」は、スケートボーダー仲間の関わりだけではなく、大人や地域社会との関わりをも含んでいるからである。そこには、「公共」と「公私」との関係において、「公／共／私」における「公」から「私」の可能性だけではなく、「私」から「共」への可能性を秘めているように思われる（菊, 2013）。彼らのスポーツ〈場〉は、自己のスポーツ欲求を満足させる「居場所」ではあった。「こうやって俺らのスポットは消えていく。それでも、そんなスポットは探せばいくらでもあるけど」というオサムの嘯く言葉を、我々大人はどのように捉えるのか。菊は「ミクロなスポーツ文化論的視点からマクロなスポーツ社会論的視点につながる「スポーツと公共性」（菊, 2013:108）をめぐる議論⁸⁾の必要性を指摘している。「公」から「共」への可能性を問うだけではなく、今後はスポーツによる、「公共」（都市広場という公共の場）と「私利私欲」（スケートボード欲求）という、「私」から「共」へ「居場所」の可能性を検討する視点を持っていかなければならない。

新聞記事で紹介した学校トイレは、何の目的（生理現象以外）もない、何もしない、教師の視線と統制も届かない（振りをしている？）仲間関係が展開する「居場所」であろう。「未だ「居場所」概念は精緻化され、共通認識が形成される段階には至っていない」というように、トイレもまた、生徒たちにとっては他者との関係を含む、象徴的暴力からも逃れる一時の「居場所」であることに違いない。

本稿では若者の居場所とスポーツの内在的価値の基礎的検討について、ダンス部活動と若者のスケートボード活動の2つの活動を考察してきた。しかし、本稿はスポーツによる「居場所」の若者自身の意味づけ方、社会的な意味づけ方を十分に明らかにするには至っていない。今後の課題として、本稿の基礎的検討の知見から論点を整理し、スポーツによる若者が、「社会の能動的形成者となる」支援の理論的な考察、理論に基づく実証的な検証、具体的な方法や施策が示される研究や議論が残されている。

[注]

¹⁾フーコーは『監獄の誕生』で、「権力は所有されるよりむしろ行使されるものであり、支配階級が獲得もしくは保持する《特権》でなく支配階級が占める戦略的立場の総体効果である」とする。権力と伴走しながら様々な人間諸科学の知が開発され、それによって物の見方や振る舞いかたなどの正常、異常が区分され微視的権力が正当化される。「微視的権力は監獄だけではなく、工場、兵営、病院、学校にはびこる。この微視的権力技術の身体への行使が規律・訓練」だとする。規律・訓練は、服従させられる訓練させられる身体、「《従順な》身体を造り出す」のである。

樋口は、規律・訓練という権力のテクノロジーにおいて「身体の従順さ」が鍵であるとして、グンダー・ゲバヴァを引用し「身体の従順さが利用されるのには、単に長期にわたる身体の服従を確実なものにするためだけでなく、まず身体を有用なものにし、特定の教育と結び付きながら、身体の従順さを利用するために身体を或る種の方法に組み入れ、最終的には新たな個人、規律・訓練を受けた個人を生成するためなのである」（樋口, 2005:53）と述べる。

2) 「およそ象徴的暴力を行使する力、すなわちさまざまな意味を押しつけ、しかも自らの力の根底にある力関係をおおい隠すことで、それらの意味を正統であるとして押しつけるにいたる力は、そうした力関係のうえに、その固有の力、すなわち固有に象徴的な力を付けくわえる」(ブルデュー&パスロン, 1991:16)。価値の押しつけは、教えられる生徒に隠され、教える教師にも隠され、それを押しつけだと気づかないことが、押しつけを隠蔽する最も効果的な方法だという。

3) 朝日新聞『私の視点』2015/3/14 青少年スポーツ「地域社会考える力をつけよ」

「中学や高校で部活動を頑張っていた生徒たちが、卒業と同時にスポーツから離れる例をみかける。(中略)近代スポーツは、近代の産業化を背景に青少年男子の規律訓練の性格を持って発展してきた。(中略)日本でも、1964年に東京五輪が開かれた時代の高度成長期、青少年のスポーツの受け皿だった部活動では目標に向かって厳しい練習に耐え抜いた者が成功者とされ、私もそこに教育的価値があると教えられた一人である。(中略)しかし、「辛抱強く、頑張る」ことをたたき込まれた時代の64年東京五輪から半世紀経ち、生涯スポーツの時代となった。価値観も多様化し、社会の形が変わり続ける今、青少年を社会の一員としてくみ入れ、地域社会について共に考えていく力をスポーツを通じて身につけていくことが必要ではないか。(後略)」(藤川, 2015) 藤川はコミュニティデザインの方法等を用いて、スポーツによる問いのたて方、活動を提案している。

4) 「決まった時間に学校に行く」「教室では静かにする」「教員の言うことには従う」などへと条件づけ、当人の意識下に隠された自分では気づかない説明できない習慣や態度に現れる。

5) 萩原は居場所を4つの意味にまとめている。

①居場所は「自分」という存在感とともにある。

②居場所は自分と他者との相互承認という関わりにおいて生まれる。

③居場所は生きられた身体としての自分が、他者・事柄・物へと相互浸透的に伸び広がっていくことで生まれる。

④同時にそれは世界(他者・事柄・物)の中での自分のポジションの獲得であるとともに、人生の方向性を生む。

6) 教育的なるものについて広田(2001)は、「教育的」という語は「教育的視点から・・・」「教育的である、ない」など一種の有無をいわさぬ規範性を帯びて用いられることが多い。1890年(明治23年)教育雑誌に登場する「教育的」の語は「教育の場で」「教育の目的で」ぐらいの意味で用いられているが、1900年(明治33年)には価値的・規範的なニュアンスを含んだものとそうでないものも含まれ、1910年(明治43年)には規範性を帯びた「教育的」なるものが定着している。また生徒の生活までが次第に教育の対象となる過程を、Ph. アリエスとE. デュルケームの研究から追っている。広田はその結果を「知識の伝達—獲得が目的であり手段でもあった中世の教育から、生活へのコントロールが教育の不可欠な要素とみなされるにいたる重要な転換点(転倒)を、14・15世紀の学寮は示している」と述べる(広田, 2001:177)。アリエスの枠組みは、デュルケームの古典的研究『フランス教育思想史』を基本的に継承している。森田は、「デュルケームは中世の大学組織の中から生まれた給費生の宿泊施設であったコレージュが、次第に内部にすべての教育機能を兼ね備えた閉鎖的な寄宿学校へと発展し、「他方アリエスもまたこの時期の変化を、「たった一つの講義からなりたっていた中世の学校から、教育のみでなく少年たちを監視し枠にはめこみ複雑な制度である近世のコレージュへの進化」として位置づけつつ、この進化を「年齢や子どもにかんする意識の進化」(森田, 1988:132)であるとする。それ以降の教師の使命は、子どもたちに知識の伝達だけでなく徳をも教育し陶冶することになり、常時監視体制と呼ぶべきものが意味をもつことになる。

この常時監視体制は、『監視』と『観察』という二重の目的に基づいていた。『監視』は逸脱行為の阻止のためのもの、『観察』は個別教育のためのものであり、『監視』と『観察』は同じ装置(監視—観察装置)に同時に2つの意図がこめられていると広田はいう。つまり「逸脱行為の阻止のための『監視』は、同時に個別教育のための『観察』でもあった」。「両者は生徒に対する常時監視—日常的で継続的な教師と生徒の接触—という手続きの上では、全く矛盾なく結合しうるもの」ということができる(広田, 2001:179)。『監視』と『観察』の共通項は、「ある一定の秩序の中に生徒個人をとりこむ(同質化)と同時に、個別化した「判定」を下す(差

異化)」ということである(広田, 2001:179 - 180)。すなわち、学校生活・寮生活・部活動において個別的にチェックするポイントが「望ましくない点」であれば『監視』、「望ましい点」であれば『観察』ということになる。これらはその後、洗練・精緻化されて、現代の学校教育では、生徒個人を細大漏らさず監視し処遇する個別化した仕組みとして、校則や学校経営上のテクニックとされる。

7) 〈場〉は、ある関与対象によって結びつけられた人々の構成する社会的圏域である。社会空間全体をマクロコスモスとすれば、その内部に多様な形で成立する複数のミクロコスモスである。ひとことで言うと、社会空間の下位概念である。

8) 「スポーツと公共性」を考える視点は、「新しい公共」が唱えられる以前から議論されていた。一つ目は、1990年前後の東西冷戦の終結に端を発したグローバル資本主義の暴走への危機意識を反映した階級的視点による、スポーツを現実的課題への「公共圏」として構想する視点である。二つ目はスポーツ文化それ自体に内在するプレイとしての特徴(特性)が人間を引き寄せることを出発点として、その文化的享受のあり様から公共性を構想する視点である。両者の接点は、前者から後者への半ば一方的な批判に終始していた感がある。

[引用・参考文献]

- 阿比留久美, 2012, 「「居場所」の批判的検討」, 田中治彦・萩原建次郎編『若者の居場所と参加』東洋館出版社 35-51
- アップル, M, 1979, 門倉正美・宮崎充保・植村高久訳 1986『学校幻想とカリキュラム』日本エディターズスクール出版部
- イリッチ, I, 1970, 東洋・小澤周三訳 1977『脱学校の社会』東京創元社
- 石井洋二郎, 1993, 『差異と欲望』藤原書店
- 荻谷剛彦・山口二郎, 2008, 『格差社会と教育改革』岩波ブックレット
- 菊幸一, 2013, 「スポーツにおける「新しい公共」の原点と可能性」日本スポーツ社会学会編『21世紀のスポーツ社会学』創文企画 103-123
- 木村真知子, 2011, 「表現運動論ーダンスはなぜ体育なのかー」杉本厚夫編『体育教育を学ぶ人のために』世界思想社 245-260
- 久富善之, 1996, 「学校文化の構造と特質」堀尾輝久他編『学校文化という磁場』柏書房 8 - 41
- 小石原美保, 1991, 「アスレティシズムの文学像に関する一考察ー『トム・ブラウンの学校生活』(1857)をめぐるー」『体育学研究』35:301-311
- 小石原美保, 1995, 『クーベルタンとモンテルラン』不昧堂出版
- 小路田泰直, 2013, 「教育としてのスポーツと「死」」『スポーツ社会学研究』Vol. 21-2:3-12
- 多々納秀雄, 1997, 『スポーツ社会学の理論と調査』不昧堂出版
- 田中研之輔, 2002, 「都市文化の身体文化ースケートボーダーの生活誌からー」『現代スポーツ評論』7 創文企画 158-169
- 田中研之輔, 2003, 「都市空間と若者の「族」文化」『スポーツ社会学研究』Vol. 11:46-61
- 田中治彦, 2001, 「関わりの中としての「居場所」の構想」, 田中治彦編『子ども・若者の居場所の構想』学陽書房 3-11
- 筒井愛知, 2012, 「高校の部活動と居場所づくり」, 田中治彦・萩原建次郎編『若者の居場所と参加』東洋館出版 127-147
- 中澤篤史, 2011, 「なぜ教師は運動部活動に積極的にかかわり続けるのか: 指導上の困難に対する意味づけ方に関する社会学的研究」『体育学研究』56:391-402
- 萩原建次郎, 2012, 「近代問題としての居場所」, 田中治彦・萩原建次郎編『若者の居場所と参加』東洋館出版社 18-34
- 樋口聡, 2005, 『身体教育の思想』勁草書房
- 広田照幸, 2001, 『教育言説の歴史社会学』名古屋大学出版会
- 広田照幸, 2015, 『教育は何をなすべきかー能力・職業・市民』岩波書店
- フーコー, M, 1975, 田村淑訳 1977『監獄の誕生』新潮社
- 藤川恭英, 2010, 「学校文化と中学校運動部活動に関する研究」筑波大学大学院人間科学研究科修士課程修士論文(未発表)

研究ノート

-
- 藤川恭英, 2015, オピニオン『私の視点』朝日新聞社, 2015年3月14日朝刊
ブルデュー, P・パスロン, J, 1970, 宮島喬訳 1991『再生産』藤原書店
ブルデュー, P, 1979, 石井洋二郎, 1990, 『ディスタンクシオン I』藤原書店
ホイジンガ, 1973, 高橋英夫訳『ホモ・ルーデンス』中央公論社
マイネル, 金子明友訳 1981『マイネル・スポーツ運動学』大修館書店
松田恵示, 2011, 「「子どものスポーツ」とは一体何か？—スポーツにおける新しい公共を考えるために—」『スポーツ社会学研究』vol19-2:5-18
森田伸子, 1988, 「アンシャン・レジームにおける子どもと社会」, 宮澤康人編『社会史のなかの子ども』, 新曜社.
中学校学習指導要領解説保健体育編, 2008, 文部科学省
子ども・若者支援推進本部, 2010, 『子ども・若者ビジョン』内閣府
東京都中学校体育連盟ホームページ, <http://tochyutai.com/>, 2015年9月6日閲覧
朝日新聞グローブ, No. 166, 2015年9月6日朝日新聞社